

## 源氏物語補作『雲隠六帖』を夢から読み解く

### "The six chapters of Kumogakure" a fan fiction of The Tale of Genji, with a focus on dreams.

芝浦工業大学柏高等学校 2年3組 板垣亜優実

#### *Abstract:*

My research theme is to analyze the dreams of "the six chapters of Kumogakure," a fan fiction to The Tale of Genji. The six chapters of Kumogakure were created by a fan of The Tale of Genji around the Muromachi period. I studied the six chapters of Kumogakure from the viewpoint of "dreams" and the influence they had on the tale.

**Keywords:** • The tale of Genji • the six chapters of Kumogakure • Dream • Buddhism

#### 1. 研究背景

近年、漫画やドラマといったコンテンツの受容形態としてファンによる二次創作が盛んに行われるようになってきている。しかしその概念自体は古くから存在しており、本研究では源氏物語の二次創作、正しくは補作に分類される「雲隠六帖」を扱う。平安時代中期に紫式部によって書かれた長編恋愛物語「源氏物語」は五十四帖で幕を閉じ、現代でも多くの人々を惹きつけている。享受の過程でその続きを欲する読者は少なくはなく、そうした源氏物語享受史の中で誕生した雲隠六帖は全体的に短いことや文体が『源氏物語』梗概書いわゆるダイジェストに近いこと、加えて浮舟の還俗や匂宮の即位等源氏物語本作からは想像の出来ない物語が展開されている点でその評価は長い間低いものだった。<sup>\*1</sup>今西祐一郎氏も「その性急な筋の展開はかなり杜撰である」と述べるほどである。しかし、雲隠六帖の作者のように執筆されてから時代を経ても続きを欲するほど源氏物語を愛した人々が居てこそ昨今の私たちは源氏に触れることができているのであり、かつそうした批判理由となる源氏本作から離れた内容からも源氏への理解と作者なりの解釈が存在すると考える。そうして雲隠六帖という文献に触れることで源氏物語の新しい解釈や源氏物語を享受してきた人々の様相を知ることができるのではないかと、または雲隠六帖の作者やこれが執筆された時代の人々が源氏物語の足りない要素として何を求めていたのかを知ることができるのではないかと、という思索を発端とし研究対象とした。

#### 2. 研究目的・意義

雲隠六帖の先行研究の中で<sup>\*2</sup>土山玄氏は「『雲隠六帖』においても「ユメ」が『源氏物語』に比べて多用されている」と指摘しており雲隠六帖においてユメもしくは夢は何か大事な役割を果たしているのではないかと考え、研究のテーマに物語内で人物が見た夢を設定した。

また、他の先行研究を読む中で雲隠六帖の仏教性の強さが物語に現れている点を取り上げられることが多く、一方でなぜ仏教に執拗に言及しているのかという点においてあまり触れられてきてないように感じた。雲隠六帖の成立背景について<sup>\*3</sup>咲本英恵氏の著書内に記載のある伊井氏の説によれば源氏物語は鎌倉時代に仏教の教えの書として読み取ろうとする風潮があり、古くから伝えられた源氏物語六十帖説が天台宗の経典と同数であったとして考えられるようになったとしており、その考えから足りない六帖分を補うために制作されたものが雲隠六帖であったのだと述べている。そうした源氏に仏教性を求める風潮があったことを踏まえ、源氏物語享受史の中の「源氏供養」が雲隠六帖成立のきっかけではないかと仮説を立て、源氏供養の影響は雲隠六帖に描かれる夢、さらに言えば夢に登場する紫の上像に出ているのではないかと考察を行った。このように雲隠六帖内の「夢」を中心に考察を行うことで物語の構造の分析、雲隠六帖が批評されるほど本作から遠い内容になってしまった要因について研究を進めることが本研究の意義だと考える。

#### 3. 研究方法

本研究で行ったことは主に二つ。一つは雲隠六帖に関する先行研究や、夢・仏教等の関連のある分野の研究資料などの文献調査、二つ目に雲隠六帖本文のテキスト分析である。

##### (1)文献調査

雲隠六帖は依然として先行研究や参考文献にあたる本・論文が源氏本作と比較して圧倒的に少ない。  
 ※<sup>4</sup>小川陽子氏による先行研究書や「夢」というキーワードから※<sup>5</sup>笹生美貴子氏による源氏本作の内容を掘り下げる文献、雲隠六帖が室町時代成立とされている観点からその時代の文献について書かれた※<sup>6</sup>恋田知子氏による研究書など「雲隠六帖」という研究対象のみに縛られないよう意識して調査を行った。その他にも先行研究として咲本英恵氏の著書や「ユメ」という語に注目するきっかけとなった土山玄氏の論文などを参考にしつつ研究を進めた。

## (2) テキスト分析

雲隠六帖には計四例ほど登場人物が夢を見る描写がある。以下の表は研究内容を整理するため作成した、夢の描かれた帖・夢を見た人物（夢主）・夢に現れた人物をまとめた表である。

少将の君とは薫と女二宮の間の息子で本作では登場していない雲隠六帖オリジナルの人物である。

③・④の夢の「夢に現れた人物（祖霊）によって夢主が仏道へ導かれる」という構図や立后を遂げる中の君の栄達を支える役割を果たす②の夢を根底として中の君が辿る物語構造が本作の明石一族の構図を

	帖名(第n帖目)	夢主	夢に現れた人物
①	雲隠(1)	冷泉院	光源氏・紫の上
②	桜人(3)	匂宮	紫の上
③	桜人(3)	匂宮	紫の上
④	雲雀子(5)	少将の君	薫

踏襲していると言える点について、そして3つの夢に現れる紫の上の雲隠六帖内の像が室町時代以前から流布していた観念に当てはまる事から雲隠六帖の成立背景の要素に「源氏供養」が加えられる可能性について、源氏供養に関する研究や雲隠六帖の成立背景に関する先行研究、夢を見た時期と重要な出来事が起きた時期が重なる事や言葉の用例、登場人物の性格についての確認等から考察を述べ論じている。

## 4. 結果・考察

雲隠六帖で描かれる4つの夢のうち、③の夢は匂宮の縁者にあたる中の君と花中書王の死を告げる役割と匂宮が仏道を求めるきっかけを提示することで物語の総括巻である八橋に繋げる役割を有している。また②の夢では紫の上が匂宮を守護していたことが明かされ、その夢が根底にあるために匂宮が即位し中の君は立后ができたといった一連の物語構造は源氏物語本作の明石一族の物語を元にしていと考えられる。そして、夢に登場する人物のうち紫の上の描かれ方から源氏供養の目的である雲隠六帖の作者は「源氏供養」の実施者もしくは享受者の一人であり、雲隠六帖の成立背景にも関わっていると考察した。

## 5. 結論及び今後の展望

結論として、雲隠六帖の夢は最終的に八橋巻のけいきん上人という人物の発言に繋げるための要素として働いている面が強い一方で縁者の死を告げるなどの役割を果たしていた。加えて今回は雲隠六帖の成立背景に関する先行研究と夢に登場する紫の上像から発展させ源氏供養の関与の可能性を考え、雲隠六帖に影響を及ぼした、現代で批評の原因となっていた時代背景の要素を考察した。

今後は室町時代の他の文献の夢もしくは平安文学における源氏物語以外の文献と比較し、より一層「雲隠六帖」という1つの物語における夢の重要性を追求しつつ、その根底に存在すると考えられる源氏供養との関連性を明らかにしたい。

## 引用文献

※<sup>1</sup>今西祐一郎「源氏物語補作 山路の露・雲隠六帖 他二篇」(2022年、岩波書店、p291)

※<sup>2</sup>土山玄「『源氏物語』及びその補作における特徴語抽出の試み」(2020年、情報処理学会研究報告 IPSJ SIG Technical Report、Vol.2020-CH-122 No.3)

※<sup>3</sup>咲本英恵「『源氏物語』の仏教的変容 中世王朝物語『雲隠六帖』試論」(2023年、三弥井書店、p18)

※<sup>4</sup>小川陽子「源氏物語享受史の研究 付『山路の露』『雲隠六帖』校本」(2015年、笠間書院)

※<sup>5</sup>笹生美貴子「源氏物語夢見論」(2023年、文学通信)

※<sup>6</sup>恋田知子「仏と女の室町 物語草子論」(2008年、笠間書院)